

*Raffiné Journal vol.16*

両足がそろふ瞬間

片足が前に進むのは、  
未来を決めたとき。

両足が前に進むのは、  
過去が終わったとき。

人が本当に歩き出す瞬間は、  
いつも静かに訪れる。

そのとき人は、  
はじめて歩き出す。

ある知らせが届いた日、  
胸の奥で、何かが落ちた。

それまで、その出来事は  
もう終わったものだと思っていた。

何年も前のことだったし、  
日常の中で思い出すことも  
ほとんどなくなっていたからだ。

時間が経てば、  
人の感情は自然に薄れていく。

そうやって  
静かに整理された出来事だと  
思っていた。

けれど、その知らせを読んだ瞬間、  
胸の奥の濁りが  
一気にほどけていくのがわかった。

知らせの内容は、  
特別なものではなかった。

ただ、ひとつだけ  
はっきりと伝わってきたことがある。

あの出来事には、  
ちゃんと意味があった。

そういう知らせだった。

人はよく、  
時間が解決すると言う。

けれど、  
時間は何も解決していないのかもしれない。

時間はただ、  
出来事を遠くに置いてくれるだけだ。

そこに意味が届かなければ、  
人の内側には  
小さな濁りが残り続ける。

知らせを読み終えたあと、  
心の奥で  
何か落ちた感覚があった。

それは  
大きな感情ではない。

ただ、  
「ああ、これで終わったんだ」  
とわかる静かな感覚だった。

その瞬間、  
過去の出来事は  
やっと過去の場所へ戻っていった。


人が前に進めないのは、  
未来が決まっていらないからではない。

まだ終わっていない過去が、  
心のどこかに触れているからだ。

未来を決めると、  
人は片足だけ前へ出す。

けれど  
過去が終わったとき、  
もう片方の足がそろろう。

そのとき初めて、  
人は歩き始める。

A photograph of a modern interior space featuring a curved staircase with white steps and a warm, glowing light strip underneath. The walls and ceiling are covered in white marble with dark, intricate veining. A large, arched opening in the ceiling frames the scene, and soft light filters through from above, creating a serene and elegant atmosphere.

過去が終わると、  
歩くことは  
とても自然になる ——



R.

Raffiné Journal vol.16  
2026

美学思想家  
古川玲奈

発行：Raffiné